大好き！幾春別川

DAISUKI! IKUSYUNBETSU RIVER

2007(平成19年)12月23日(日曜日)（1）

VOL.20

●無料誌 ●年4回発行 ●部数:5万部 ●配布エリア:岩見沢市・三笠市・美唄市

発行元：幾春別川ニュース編集委員会
編集委員長　嵯峨　義輝

〒068-0007
岩見沢市7条東9丁目　石狩川開発建設部岩見沢河川事務所内編集委員会事務局
TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

緑中学校の生徒さん

小学生と一緒に学習！
いろいろな発見が
ありましたヨ！

みんな、生きているサケに初めてさわりました！　「こんなに大きいものなのかとびっくり！」「海からこんな内陸にまで、よく上ってこられるね」などと驚きの声が多々ありました。ちょっとドキドキしながらサケをつかんで記念撮影！
（そのあとすぐにサケを水槽に戻しました）

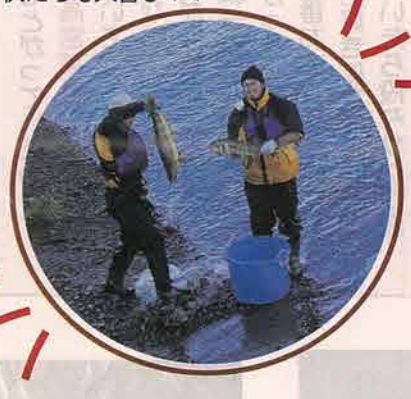
サケが今年も故郷の幾春別川に戻ってきました！

「サケの特別採捕・体験学習」

「幾春別川をよくする市民の会」は平成３年から幾春別川へサケの放流活動を行っており、毎年、そ上するサケの姿が見られます。

同会は毎年１０月下旬、市内の小中学生を対象に「サケの特別採捕・体験学習」を実施しています。サケの姿にふれることで自然界のサイクルや生命の尊さを感じ、そして川への興味と知識を高めることを目的にしています。岩見沢市の川向頭首工で、今年は３０日に三笠市の岡山小学校の１年生から４年生までが、３１日には岩見沢小学校の４年生と緑中学校の生徒が、サケや幾春別川について色々なことを学びました。今回はその様子をご紹介します。

投網（とあみ）の実演中にサケが２匹かかりました。
子供たちも大喜び！！



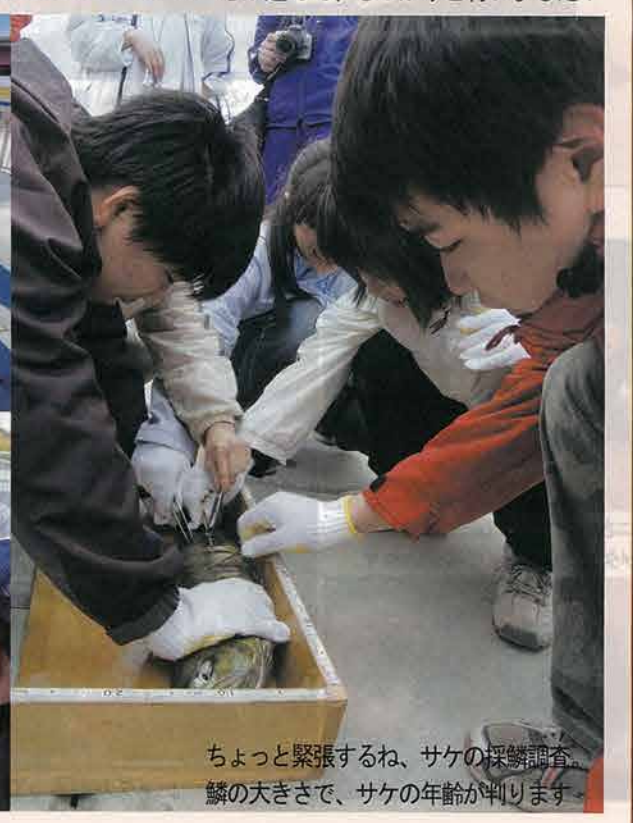
川の環境を守ることの大切さを学びました！

体重・体長検査、採鱗（さいりん）、水質検査などなど。

サケの体重や体長測定、そして鱗を採り、サケの生態調査を子どもたち自らが進んで、しっかりと行いました！

調査の終わったサケを川に放すために網で運びます

興味津々！　水槽の中には何がいるのかな？



ちょっと緊張するね、サケの採鱗調査。
鱗の大きさで、サケの年齢が判ります。

川向頭首工の魚道

落差が激しすぎるとサケは上流に行けないため、川向頭首工では段差を付けてスムーズに行けるように設計されてあります（魚道）

← （2ページ目も関連記事です）

※サケの特別採捕は北海道知事の許可を受けて行っています。

流域の鳥たち Vol.3

写真家　**若林　信男**
（わかばやし　のぶお）
岩見沢市在住

メスのクマゲラ

クマゲラ　オス・メス　（留鳥・キツツキ科）

クマゲラは国内最大のキツツキで、国の特別天然記念物に指定されています。

北海道を中心に、東北地方のごく一部に生息し、絶滅危惧種に指定されているキツツキです。空知管内でも少数しか確認されておらず、減少傾向にあります。

原因は、天然林の減少や写真撮影などと言われていますが、特に写真撮影のために営巣木に長時間居座ったり、大勢の人が押しかけたりといった声を多く聞きます。最近では人的被害の方が多いようにも思われます。

習性やマナーを良く知った上で撮影に望んでほしいものです。

クマゲラが生息しているということは、そこに豊かな森があると言うことです。豊かな森が、豊かな水を私たちに提供してくれていると思います。

オスのクマゲラ

1ページの続きです。

感想文

岩見沢小学校（42人）と緑中学校の皆さん（7人）から体験学習の感想文をお寄せいただきました！

その一部をご紹介します。

水質検査。
興味深い結果が出たかな？

古川末菜さんの作品
「エゾウグイ」

澤村結佑香さんの作品
「サケとヘビトンボ」

そ上したサケを捕獲するために設置した仕掛け

網で水槽の魚をすくいます。
さてさて、何が採れたのかな？

「サケ、いるかな？」
三笠・岡山小の皆さん
この下に水槽があり、捕獲したサケが泳いでいます

緑中サイエンス部

【舘勇希】川の水質や酸素濃度などを知ることができて貴重な体験でした。今回学んだことを生活に生かしたい。【辰田智子】同行した小学生たちの元気の良さに驚いた。【吉井翔太郎】押さえつけられたサケが暴れていて、少しかわいそうに思いました。【熊谷和将】川の水のきれいさがよくわかりました。汚れないように気をつけようと思いました。【湯本健太】サケは生臭かったので触ることは嫌でしたが、どんな物だったかよくわかりました。【千葉里奈子】特に水質検査が、私たちがしたことのない実験だったので良かった。【鈴木昴】サケの鱗採りと水生生物による水質判定が面白かった。

水質検査などを専門に行っている会社の人から、幾春別川の水のきれいさについて教えてもらいました

岩見沢小

【伊藤優花】サケは歯がとてもとがっていたので、すごくびっくりしました。【高宮美春】うろこ取りをやろうとしたらサケが動いて、手にヌルッときたのでうろこを一つも取らないでやめました。【長嶋俊樹】マダラカゲロウが取れたときはうれしかった。水質検査のときは科学者になった気分。【八柳真奈】サケの目がこわかった。【横井もも】サケを網でつかまえるのが一番おもしろかった。【村屋友香】幾春別川がとても好きになりました。【岩間涼花】うろこをとっていたら段々サケが弱ってきてかわいそうでした。【堀籠可奈子】サケを網でとったのがはじめてだったのでとても楽しかった。【伊藤和磨】ヘビトンボがヒゲナガカワトビケラを食べるところを見たいなあと思いました。【合田理来】一番楽しかったのはヘビトンボとかをとれたこと。【小島有咲】放流したときは2、3cmだったサケが70cmだったので、すごくびっくりした。でもいつか人間に食べられるときが来たらすごくかわいそう。【古川末菜】特に楽しかったのは水質検査。色が変ったり、幾春別川がどれだけきれいなのかもわかりました。【藤雄大】エビのほかにもガガンボとかチョウバエとか色々なものがいて楽しかった。【加藤健太】川の中の虫で初めてさわったのがいたのでうれしかった。

▲カニさんをつかまえることができたよ！

メダカ。ちっちゃくて可愛いね▼

▲「ミニリバー」 メダカが入っている小さな小さな川で、園児たちは元気よく遊んでいました！

カミネッコンを使ってサリカの植栽もしました

子どもも大人も水と戯れる秋の一日

第6回 川をはかる・川を見る・川を知る～五感で体験する旧美唄川河川調査

9月14日（金）旧北村のほぼ中央を流れる旧美唄川「水辺の楽校」で、今年で第6回目を数え、すっかり地域に定着した「川をはかる　川を見る　川を知る　河川調査講習会」を開催しました。

今年の水辺の楽校には、河川工事（河床の掘り下げなど）で出た栄養たっぷりの残土を入れ、一生懸命石を拾い出した畑に、講習会当日は真黄色のヒマワリが咲きほこっており、とっても和やかな景色の中、開会式は始まりました。

さて、午前中は河川調査ですが水質の変化もなく、見た目とは裏腹な、きれいな環境も見て取れましたが水量が少なく感じました。

なかでも、小さな人工河川をこしらえて、川辺の生き物を子供たちが直接触れ合える「ミニリバー」は大変好評でした。恒例！？のモクズガニもミニリバーに放され、勇気のあるちびっ子は、両手にカニを持ち上げ、はさみが心配な先生を尻目に、決闘ごっこをさせるのでした。

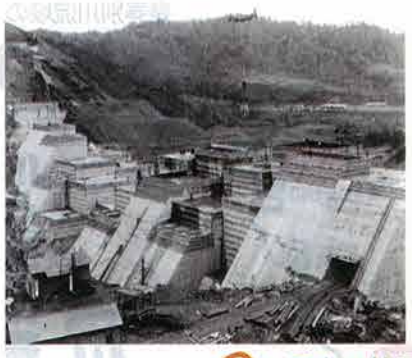
その後、河川敷地にサリカのカミネッコンを植樹しました。昼食は、事務局や参加者有志がこしらえたおいしいカレーライスをいただき、午後からの体力勝負に備えました。

午後からは「水辺の楽校」から約3km下流まで、カヌーで下り、川岸の景色（木柵工）・野鳥（カワセミ・ツバメ）などの観察を行いました。10艘ほどのカヌーを用意し、その内2艘については、平成16年に作った手作り自作カヌーで、川下りの感激もひと塩のものです。

昨年切り替えが完了した幾春別川新水路の影響でしょうか、途中水深が浅く、カヌーを降りる場面も見られましたが、ベテランの参加者は、器用にカヌーを操り、さっそうと下っていました。初秋の雰囲気を感じるさわやかな天気の中で、みなさん収穫の多い講習会となりました。

（文責／NPO法人山のない北村の輝き　橋本　拓）

午後からはカヌーで河川調査！



建設中の桂沢ダム（写真は昭和30年ごろ）

新桂沢ダム完成イメージ

現在の桂沢ダム

桂沢ダム誕生50周年

「幾春別川総合開発事業」は、昭和３２年に建設された桂沢ダムを嵩（かさ）上げして「新桂沢ダム」を建設する再開発と、幾春別川支流の奔別川に「三笠ぽんべつダム」を新設する事業です。

これら２つのダムは、「洪水調節」「流水の正常な機能の維持」「水道用水の供給」「工業用水の供給」「水力発電」の役割があります。幾春別川流域の安全と、広い地域に水を供給することで豊かな地域の形成と発展に寄与しています。

●治水・利水・水力発電などなど！

桂沢ダムの力だけでは、１００年に一度の大雨の場合、川の水が堤防を越えて溢れ出してしまう可能性があります。２つのダムが出来ることで、大雨のときには三笠市街地での幾春別川の水位を約０．６ｍ下げて、洪水の被害を軽減することができます。また、現在のダムよりもたくさんの水を貯めることができるため、渇水時に放流することで流水の正常な機能を維持することができます。

桂沢ダム嵩（かさ）上げに伴う取水塔の工事▶

桂沢湖畔で記念植樹

桂沢湖畔公園で10月１４日、「みかさ桂沢紅葉まつり」に合わせて「桂沢ダム建設50周年植樹会」（みかさ桂沢紅葉まつり実行委員会主催）が開催されました。小雨の降るなか50人ほどが参加し、カツラやハンノキ、ハルニレなどの苗木２００本ほど植えました。たどたどしい手つきながらも、一本一本丁寧に植えていく可愛らしい小さな手もありました。この子が大きくなったとき、植樹した木も見事に成長していることでしょう…！

沙智子の体験レポート

幾春別川探検隊！

今回は、現在工事中の

「新桂沢ダム　再開発事業」

をご紹介します！

■北海道教育大学岩見沢校　スポーツ教育課程　アウトドアライフ専攻2年、花田沙智子(はなだ　さちこ)がレポーターとして、幾春別川流域の川と関りの深い施設をご紹介していきます！

今回の案・内・人

石狩川開発建設部
幾春別川ダム建設事業所　調査設計班
計画係長
山本　重樹（やまもと　しげき）さん

１００年に一度の大雨による洪水被害を軽減するため、２つの新しいダムを建設中です。幾春別川流域の皆さんが安心して暮らせるよう事業を進めています。

沙智子の感想

工事は圧倒的な迫力で私の目の前に迫っていました。人の手によって、ここまで大きなことが出来るのか…。

「ダムは環境を破壊するのでは」という声があります。新しいダムはなぜ必要か？　ダムは洪水を防ぎ、ダムに貯めた水は水道水や工業用水、発電に使われています。私たちの日常生活を支える水やエネルギーは、こうして供給されていたのです。多くの人々が安全で、安心して暮らすことを考えて、環境整備が成されています。人は水がなければ生きていけない。効率よく、大切に使いましょう！　そしてときには、ダムに沈む森のことも考えたいものです。

わたしたちのまちをきれいにしよう！

今年も、各市民団体による恒例の河川の清掃活動や植樹活動が幾春別川流域の各地で行われました。

三笠市の桂泉橋など７ヶ所で行われた「幾春別川クリーン作戦」では、地域住民やパークゴルフ愛好者が300人ほど集まり、生活ゴミから大型ゴミなどを丁寧に取り除いていきました。また同日「幾春別川緑の回廊づくり植栽事業」も萱野橋付近であり、近在の岡山小と萱野中学校の児童と生徒が参加してカミネッコンを作り、植栽しました（主催は共にNPO法人　三笠森水遊学舎主催）。寒さが身にしみる日でしたが、子どもたちは一生懸命にカミネッコンづくりに取り組んでいました。

19日には岩見沢市北村の大沼周辺で「緑の回廊事業」（NPO法人　山のない北村の輝き主催）を、22日には岩見沢市のリバーパークゴルフ場付近で「緑の回廊メンテナンス」（幾春別川をよくする市民の会）が開催されました。ポプラの枝の下払いと、樹木医による木の病気予防と治療も行われました。

「じっくり時間をかけて、緑豊かな美しいまちにしていこう」と心を込め、それぞれの参加者は活動に当たっていました。

カミネッコンを手にする萱野中学校のみなさん

わたしたちの活動紹介

Part. 8

川を中心にした活動を展開する仲間たちをご紹介します。

■岩見沢市

利根別川をきれいにする市民の会

町会単位で草刈も行っています

平成3年5月、建設省（当時）より「ラブリバー制度」の認定を受けて、岩見沢市内を流れる利根別川を昔のように〝子供が遊べるきれいな川〟をよみがえらせようと市民ぐるみで、「第1回　利根別川クリーン・グリーン作戦」を実施しました。

この作戦は川を見つめ直す機会となり、川辺を歩きながらゴミ拾いを実施しました。

その後、沿川の11町会によって草刈りなどのボランティア活動が開始され、平成4年4月には、趣旨に賛同した事業所や学校などが参加し、現在の「利根別川をきれいにする市民の会」として発足しました。

「利根別川クリーン・グリーン作戦」では市内の小・中学生がオープニングセレモニーの中心となり、また清掃終了後、高校生の吹奏楽部によるコンサートも開催され、清掃や花の植栽に汗を流した参加者を癒してくれています。

この事業も今年で17回を数え「花と苗木のマーケット」も同時開催され、今では春の大イベントの一つとして多くの市民の皆様に親しまれています。

さらに、ラブリバーによって植えられた「千本桜」が春には咲き乱れ、道行く人の目を楽しませてくれます。その桜の木のメンテナンスや河道の草刈りも実施し、利根別川の景観維持に努めています。

（文責／会長　勝井裕幸）

※利根別川千本桜並木道は平成19年度の「手づくり郷土賞」大賞を受賞しました。
（主催／国土交通省）

▲「クリーン・グリーン作戦」で花の苗を植えているところ
市民会館横の遊歩道に植えられた桜。美しい並木が続きます◀

幾春別川流域の
風土資産
パート．2

川と流域の暮らし
「川の道・石狩川」

丸木舟で川を下るアイヌたち（北大付属図書館蔵）

昔の北海道には道らしい道はなく、アイヌの人たちは石狩川を利用して交易やサケ漁を行っていました。

安政4年（1857年）松浦武四郎の石狩川探検をはじめ、先人たちは石狩川を遡って内陸に向かいました。

明治に入ってからも石狩川は、ますます重要な「川の道」として利用されていったのです。

開拓者が未踏の地に入るときには、川を使うしか方法がありませんでした。

また、川の屈曲が道案内の標（しるべ）ともなったのです。当時は川が縦横に走っており、小さな舟で自由に往来できました。

開拓者たちは、自ら夕モの大木をマサカリでくり抜いて丸木舟を造り、日常の移動手段として利用していました。

この頃の石狩川は埋木や流木が多く、川舟が座礁したり転覆することが少なくありませんでした。

道庁は明治22年、倒木防止のため河岸約200kmにわたり樹木の伐採をすすめ、明治24年からは埋木と流木を取り除くための工事を開始しました。

また、樺戸集治監では、江別から月形へ至る水路を確保するために、樺戸集治監の囚人70～80人が連日二ケ月間にわたり、流木を除去したこともあります。松浦武四郎が幕府調査隊の一員として石狩川を調査してから、今年で150年を迎えます。

■出典／『石狩川・幾春別川 風土資産ガイドブック』

▶明治40年頃の石狩川舟運

▼石狩川を遡る舟「石狩日誌より」（北海道立文書館蔵）

※幾春別川流域には、先人たちが培ってきた貴重な風土の資産が数多く存在しています。本紙ではそのような風土資産を取り上げ、連載でご紹介していきます。

水辺の風景

「たっぷ大橋遠望」 岩見沢市北村　尾田 和雄さん

岩見沢から新篠津村に行く途中に架かるたっぷ大橋。10月半ば、橋の近くにある大沼に降りて撮影しました。渡り鳥たちはすでに旅立っており、澄んだ秋の空が水面に美しく、そして静かに反射していました。

■場所：岩見沢市北村幌達布

写真募集　あなたの好きな水辺の風景を写して、本紙事務局までお送りください！

■応募内容

プリント、デジタル、ポジフィルムなど形態は自由です。写真のほかに、川への「想い」を100文字程度にまとめて、下記のおたより欄に記載してある住所までお送りください。本誌「大好き！　幾春別川」に掲載させていただきます。※1人何点でも応募できます。また、写真の返却はいたしませんので、あらかじめご了承ください。

川とわたしの思い出

美唄市
都市整備部長
加藤（かとう） 誠（まこと）さん

私の生家は美唄市中村で、石狩川を挟み、浦臼町の対岸に位置していました。当時の築堤は現在の築堤より、400メートルほど石狩川寄りで、当時の住宅や家の周囲の田畑は、今では河川敷になってしまいました。

母の実家が浦臼町だったことから、一年に何回かは浦臼町に行ったものです。

昔の記憶であることから、多少違っているところがあるかもしれませんが、渡船は両岸を太いワイヤーロープで結び、船が下流に流されないよう、そのロープに船をつなぎ両岸を往復していました。

当時の船頭さんは浦臼町側に住んでおり、渡船を利用するときには、美唄市側から大声で船頭さんを呼び、迎えに来てもらっていました。

冬場は石狩川が全面凍結したことから、歩くだけではなく、湯たんぽを積んだ馬橇に乗って川を渡ったものです。

夏場のもう一つの思い出は、川ガニを獲ったこと。直径30センチメートルほどの針金の輪に、用水路で獲ったタニシを付け、2～3センチメートルのひもに結びつけ、川の中に投げておき、10分ほどでひもを手繰り寄せるとカニが2～3匹は付いており、多いときには一斗（18リットル）缶に一杯になるほどの収穫があったものです。それをゆでると鍋の表面にはびっしりと油が浮き、毛がに匹敵するような味だったことを思い出します。

その他、石狩川の氾濫によって住宅が床上浸水したことなどが懐かしい思い出です。

最後に、現在、美唄市民・浦臼町民の有志により設立された「美浦渡船を守る会」により、北海道唯一の渡船である美浦渡船がいつまでも存続されること、石狩川が昔のような自然環境を取り戻すことを願いつつ、筆を置きます。

対岸の浦臼と美唄をつなぐ美浦渡船

昭和30年代の石狩川

お・た・よ・り　募集中

お待ちしております！

本紙は、楽しい紙面を作るためにみなさまからのご意見や感想、また、今後取り上げてほしい記事の内容などについておたよりを募集しております。下記のあて先までおたよりをご郵送ください。

★送付先★
〒068-0007 岩見沢市7条東9丁目
石狩川開発建設部 岩見沢河川事務所内
「大好き！幾春別川」編集委員会事務局
※ご質問の場合も、郵送またはファックス（0126－25－1697）へお願いします。

年間行事予定

■桂沢悠遊冬遊び
開催日：平成20年2月9日（土）
場　所：桂沢ダム（三笠市）
主　催：悠遊桂沢倶楽部

■第6回　旧美唄川雪中植林
開催日：平成20年2月10日（日）
場　所：旧美唄川河川敷地
主　催：旧美唄川雪中植林実行委員会
●問合せ先：岩見沢市北村支所建設課
☎（0126）56－2001

山のない北村に森をつくろう！